



「Snowscape #3」 80×80cm



「Snowscape #2」 80×80cm



くきまち・あきら
1968年神奈川県生まれ。95年多摩美術大学大学院修士課程絵画科日本画専攻修了。95～96年マルセイユ・フランス国立美術学校。99年度パリ第8大学大学院メディアアート科修士課程修了。文化庁在外派遣芸術家としてパリで活動。国内外で個展、グループ展多数。また建築とのコラボレーションによる作品インスタレーションや、様々なオブジェのデザインなども手がける。現在フランス、パリ在住。



「Waves #10」 194×112cm

宇宙からの視点

CLOSE UP 4 C19 山下画廊 釘町彰展

昨年の「光」をテーマにした「[lightscape Colors]」シリーズとは一変し、モノトーンによる雪山を描いた新シリーズ「Snowscape」を発表する。

取材地はスイスのモンブラン。数年来暖めてきた本シリーズは、標高4000メートル級の雪山を7、8年前に見た時の驚きが直接的な制作の発端だが、実は幼き頃に両親に連れられてヨーロッパを旅していた時に、一番脳裏に焼き付いていたのがこの雪山だったという。「雪山を絵画として描写したい」というのではなく、特に雪と岩肌を作り出す抽象的な模様、自然が偶然に作り出す形に魅かれました。それは人間の世界や人智を超えたものでした。もちろん人間の視点やコンテキストが作り出すアートのルールを度外視すればですが、人間が作りたいかなるものよりも崇高で美しいと感じたのです。

雪山の様子は、刻々とその姿を変容させる。温暖化が進む現在の地球では、数十年の後、モンブランの山肌から雪の様相が消えてしまうことさえ推測される。本人が言う様に、「Snowscape」はメッセージ絵画ではないが、そういった環境問題や地球の温暖化、現在私たちが直面しているエネルギー問題に対する危惧も、密かに暗示されているのだ。

制作プロセスを紹介しよう。まずは、自身が撮影したモンブランの写真をもとに、構図をパソコン上で徹底的に詰めてゆく。それをスキャンし、空の黒と雪の白のグラデーションのしつかりと作った下地の上に、輪郭を描く。それから少しずつ、雪や岩の部分、写真に完全に従って描画する。材料は下地に墨を使うほか、すべて天然の岩絵具と胡粉を使っている。

「自己を滅却し、ひたすら客観的に形を追い、対象に没頭します。最終的には、胡粉で一度形を消し、その上からまた描き起こしていきます。そしてまた消し、また描く。それを繰り返すのです」

こうした緻密で知的な工程を踏み、能動的に作業を進めながら、完成作ではその痕跡を残さない。この方

法論は、釘町のあらゆるシリーズに共通する。

「Snowscape」の雪山が存在する時空は、昼でもなければ、夜でもない。深い静謐を湛えた宇宙的な陰影が雪山を取り巻き、見る者を無限空間へと誘い込む。そのイメージは、外部に広がる宇宙（マクロコスモス）でもあれば、我々の内部に広がる無意識という宇宙（ミクロコスモス）にも繋がってゆく。

今回のシリーズにはスクエアの画面が用いられるが、それによって潜在する抽象性がより深められ、描かれた山は目の前に広がる単なる山の風景ではなく、宇宙から見た地球という超越的な視点とともに、いわばカルトグラフィック的（地図的）な模様が浮かび上がってくる。そして、これは以前から制作しているWAVESシリーズに共通していることだが、和紙の皺や写真のトリミングによるこれらの模様は、日本美に見られる見立てとしての意味性や具象性をしっかりと孕んだ上での抽象性だ。

客観的な形を徹底的に写真してゆき、極まったところで、その固有性を超越させる釘町の絵画。寡黙でシンプルな画面の中で、この画家は壮大な冒険を試みている。

（編集部）